

沢木耕太郎

第二便 ペンシャの風

深夜特急

新潮社

CHEMIN DE FER DU NORD

TE
UE
-CÔTE D'AZUR
RS DE LUXE

深夜特急

沢木耕太郎

第二便 ペンシャの風

新潮社

深夜待合

第二便 ペルシヤの風

印刷——一九八六年五月二十日

発行——一九八六年五月二十五日

定価——一二〇〇円

著者——沢木耕太郎

装幀——平野甲賀

装画——カッサンドル

発行者——佐藤亮一

発行所——株式会社新潮社

所在地——162 東京都新宿区矢来町七一

電話——業務部(03)二六六—五一—
編集部(03)二六六—五四—

振替——東京四—八〇八

印刷所——二光印刷株式会社

製本所——大口製本株式会社

© 1986 Kōtarō Sawaki, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛にご送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-327506-5 C0026

深夜特急・第二便・目次

第七章 神の子らの家

インド I

7

カンジーが「神の子」と呼んだ最下層の人々の子供たち。彼らのための孤児院であり、学校であり、職業訓練所でもあるアシュラムで、私は「物」から解放たれてゆく……

第八章 雨が私を眠らせる

カトマンズからの手紙

95

ここカトマンズでは、旅の途中でひとり、またひとりと若者が死んでゆきます。ハシシを吸い、夢とうつつの間をさ迷いはじめると、恐怖感は薄いヴェールに覆われて……

第九章 死の匂い

インド II

115

ベナレスは、命ある者の生と死が無秩序に演じられている劇場のような町だった。私はその観客として、日々、遭遇するさまざまなドラマを飽かず眺めつづけていた……

第十章 峠を越える

シルクロード I

159

バキスタンのバスは凄まじかった。猛スピードで突っ走り、対向車と胆試しのチキン・レースを展開する。クレイジー・エクスプレスに乗って「絹の道」をアフガニスタンへ……

第十一章 柘榴と葡萄

シルクロード II

201

ヒッピー宿の客引きをしながら、断食明けのカブールに思わぬ長居をしてしまった。そんな時、日本から届いた一通の手紙が弾みとなって、私は更にテヘランへ向かう……

第十二章 ペルシャの風

シルクロード III

251

イランの古都イスファハンで、「王のモスク」を吹き抜ける蒼味を帯びた風の中に、老いてもなお旅という長いトンネルを抜け切れない自分の姿を見たような気がした……

深夜特急・第三便・目次

第十三章 使者として

トルコ

第十四章 客人志願

ギリシャ

第十五章 絹と酒

地中海からの手紙

第十六章 ローマの休日

南ヨーロッパⅠ

第十七章 果ての岬

南ヨーロッパⅡ

第十八章 飛光よ、飛光よ

終結

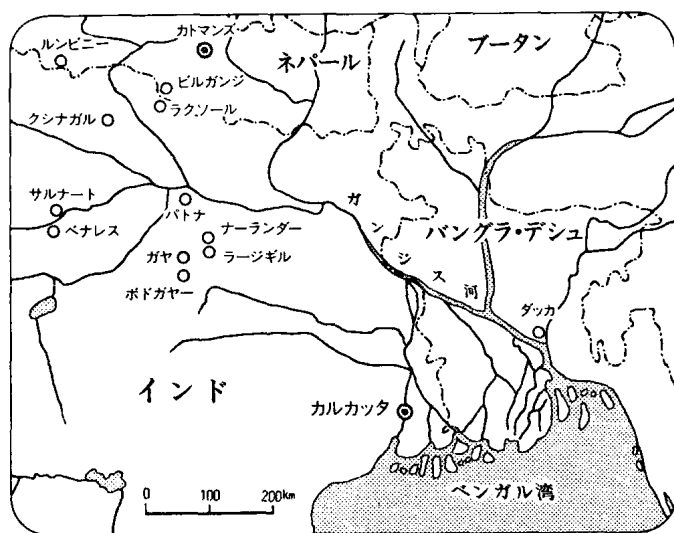
深夜特急

第二便 ペンキの風

第七章

神の子らの家

インド
I



1

インド航空機が、暗い闇の底に沈んでいるようなカルカッタのダムダム空港に降り立ったのは、予定より一時間ほど遅れて午後八時半を少し廻った頃だった。

香港もバンコクも湿気の多いねっとりとした暑さだったが、カルカッタの暑さはそれよりさらに重く粘りけがあるようだった。空港ビルに入っても、冷房がきいているのかいないのか少しも涼しくならない。

入国の手続きはいたって簡単だった。ものの十五分もかからないうちにターンテーブルの前まで来ることができた。私は自分の荷物が出てくるのを待ちながら、とにかくインドに辿り着いたのだという、喜びと不安がないまぜになったささやかな感慨に耽っていた。

……シンガポールの日本人墓地でカルカッタへ行こうと思い決めてから、実際にこのカルカッタ行きの飛行機に乗るまでの何日かは、めまぐるしくくらいに忙しかった。

ひとたびカルカッタという街の名が頭の中に棲みついてしまうと、もう一日も早く行きたくなって

しまった。そのための最も手っ取り早い方法は、新たにシンガポールからカルカッタまでの航空券を買うことだったが、しかしそれでは私が持っているバンコクからデリーまでの航空券が無駄になってしまう。私はその日のうちにオーチャード・ロードの旅行代理店へ行き、新たに航空券を買うことと、いったんバンコクへ戻って持っているチケットを有効に活用するのとどちらが安上がりか調べてもらった。

それによれば、たとえ国際列車で三日がかりで戻ったとしても、新規に高い航空券を買うよりはるかに安く上がるらしい。もっとも、持っているチケットを活用するといっても、それにまったく問題がないわけではなかった。果して、バンコク・デリーのチケットをバンコク・カルカッタに換えてくれるかどうか、確かなことはまったくわからなかったからだ。チケットを見ると、「変更不可」と書き込まれている。しかし、こちらは遠くに行きたいというのではなく、近く、それも半分くらいの距離のところに行きたいというのだ。なんとかならないこともないだろう。私は簡単で確実な方法ではなく、とにかく金のかからない方を選んだ。いささか大袈裟おあげさまな言い方をすれば、賭けたのだ。

翌日、親しくなった特派員の一家に別れを告げ、シンガポールの鉄道駅からバンコクに向かうインターナショナル・エクスプレスに乗り込んだ。朝の八時に出発して、着いたのが二日後のやはり朝の七時。一カ月もかけて歩いた土地を僅か四十七、八時間で走り抜けたことになる。

私はバンコクに着くと、その足でシロム通りにあるインド航空の支店へ向かった。ルート変更の交渉は、だが予想以上に難航した。チケットに「ノット・ヴァリアブル」と書いてあるではないか、というのがカウンターの女性の言い分であり、それはまったく正当だったのでこちらとしても反論のしようがなかった。しかし、それでハイと引き下がっては、バンコクに戻ってきた甲斐がない。私は必死に粘った。

カウンターの女性は無固として譲ろうとしない。その強硬さに、私も一時は諦めかけた。距離を短かくするのだからいいではないか、というのはいくまでもこちらの勝手な理屈であり、チケットに変更できないと書いてあるのだから変更するわけにはいかない、という彼女の論理を打ち破れるほどの説得力はなかった。

遂方に暮れていると、そこに彼女より上級の職員らしい^{かつぶく}恰幅のいいインド人の男性が姿を現わした。彼はカウンターの女性から事情を聞くと、それはやはり難しいとでもいうように私に向かつて首を振った。だが、彼が出てきてくれたのはこちらにとつては幸運だった。彼の方がその女性よりはるかに話を通じやすそうだったからだ。このチャンスを逸したらカルカッタまでの航空券を買わなくてはならない羽目に陥ってしまう。私は頭で懸命に英語の文章を組み立て、臆面もなく並べ立てた。

私はインドからバスに乗ってロンドンへ行こうと思っている。その目的にとつてはデリーからでもカルカッタからでも大した違いはない。しかし、ここからデリーへ直接行ってしまうと、私はインドの大半を見ないまま前に進んでいくことになるだろう。ほんの一部をかすめただけでインドという国を判断してしまうかもしれない。カルカッタに行くことができれば、デリーに着くまでインドをゆつくり見て廻ることが出来る。あなたは自分の愛する国を異国の若者に見せたいとは思わないか。それとも、見られるのがいやなのだろうか……。

我ながらよく言うぜ、と頭の片隅で思いながら長広舌をふるっていると、彼がにやりとして言った。「わかった、変更しよう。私もカルカッタの出身だ。ベンガルがどれほど素晴らしい土地かを見てもうのは、こちらとしても望むところだ」

そして彼は、ただし、と付け加えた。

「距離が短くなつた分の運賃の差額は、請求しないでくれないうか」

差額をもらうなど考えもしなかった。もちろん、と私は勢いよく答えた。

チケットを書き換えてもらい、礼を言って出ていこうとすると、彼は突然、流暢な日本語で話しかけてきた。

「我妻先生はお元気でしうかね」

私が驚くのを楽しみでもするように彼はさらに言った。

「私は、東京大学で我妻先生に法律を習っていました」

我妻先生とは『民法大意』を書いたあの我妻栄のことだろうか。彼に訊ねると、そうだと答える。

こちらでも大学時代に、教科書として『民法大意』を使わされたことはあるが、その民法の大学者に直接教えてもらったわけではない。

「さあ……」

私が首をひねると、彼はさほどその質問に執着するでもなく、そうですか、とあつさり引き下がった。しかし、彼が日本語が堪能だとわかると、奇妙なことに、さきほど自分が臆面もなく英語の能書きを並べ立てたことが急に恥ずかしくなってきた。外人相手に下手な英語を使っているのを、横で日本人に見られた時のような恥ずかしさだった。

そそくさとそこを出てから、彼が本当に東大で我妻栄に習ったのかどうか、疑問に思えてきた。我妻栄に直接教壇の上から講義を受けたにしては若すぎたからだ。あるいは、それは日本人の度胆どきもを抜くための、彼の得意のジョークだったのかもしれない。我妻先生はお元気ですか、といきなり言われても、弟子でもない日本人にわかるわけがない。日本人の東大崇拜を逆手にとって、日本人を煙にまいては面白がっているだけなのかもしれない。そうだとすれば、私もまたうまくからかわれたということになる。

だが、いずれにしても、私は彼のおかげでカルカッタへ飛ぶことができるようになったのだ……。

ターンテーブルが動き出し、荷物が流れはじめた。私は自分の薄汚れたザックが出てくるのをぼんやり待っていた。

「市内ですか？」

背後で声がした。しかし、それが自分に向けられたものだとは思わなかった。

「市内に泊まるんですか？」

繰り返された言葉が日本語だということに気づいて、私は初めて後を振り向いた。するとそこには、私とほとんど同年配の日本人の若者が、不安げな様子でぼつんと立っていた。サファリ風の半袖シャツにコットンのスラックス、着ているものから判断するかぎりでは、かなり真つ当な旅行者のようだ。髪もきちんと分け、眼鏡をかけている。

何か用ですか、というような顔を向けると、彼は少し表情を緩めて言った。

「今夜はカルカッタの市内に泊まるんですか？」

「ええ、そのつもりですけど」

「ホテルは決まっていますか？」

「別に……」

その答を聞いて、彼はがっかりしたようだった。

「そうですか……」

どういふことなのか少し気になった。

「ホテルがどうしましたか？」

今度は私が彼に訊ねる番だった。

「いや、もし決まっているのなら、一緒に連れていってもらおうかと思って……」

そういうことだったのか、と納得した。

「日本を出てくる時には、着けば着いたでどうにかなるさなんて考えていたんですけど、いざ着いてみると心配になってきて……夜ですしね」

私にしてもこんな夜遅くひとりで宿を探さなければならぬのは初めての経験だった。タイのチュムポーンに着いた夜も遅かったが、あの時は土地の若者たちが案内してくれた。昼には簡単なことで、夜になると存外難しいことがある。しかし、インドの、それもカルカタで、その日の宿が決まっていなかったということが、私には少しも不安ではなかった。彼の台詞^{せりふ}ではないが、どうにかなるさ、と思っていた。

「でも、今夜はどうするんです？」

そう言われても、具体的には何も浮かんでこない。ここを出たらツーリスト・インフォメーションに寄って情報を仕入れようと思う。考えるのはそれからだ、と私は答えた。

「それでうまく見つかりますかねえ」

彼が心配そうに言う。その口ぶりには、いかにも私を頼り切った気配がうかがわれた。困ったな、と思った。自分ひとりならどうにでもなるが、このような真つ当な旅行者と一緒にどうしても臨機応変というわけにはいかなくなる。泊まれる宿も制約され、足元を見透かされてしまうだろう。

その時、ターンテーブルに私のザックが出てきた。ちょうどいいタイミングだった。私は、では、と言ってその場から離れようとした。ところが一瞬早く彼が言った。

「できたら、同じホテルに泊めてくれませんか」